

二月作品

その一集



狩野 一男選

異国の授業

高橋 みどり *イギリス

戻りたき国は世界の中心で咲き誇らずとも戦なき国

すりガラス越しにニュースを観るようで 祖国の地震、暴風雨、熊パデイントン、プーの生れたるこの国の野生の熊は絶えて久しき

ニッポンの代表のように日本語を語る怖さよ 異国の授業

大学院に園児がひとりの心地して留学、少し、疲れかけてる
主任さん、先生、みなさん、大家さん ファーストネームか you ですむ国

良 い 日 四 宮 詠 子 北海道

おかへりと声かけくるる隣家の人週末のみの在宅の吾に

二患保持者

小野寺 政 賢 岩 手

いつてらつしやい管理人の声に送られて札幌を発つ勤務地に向けて
夏長しと予報で言つてゐたけれどそれは内地のことだけらしき
頭にはいくつかの言葉ありたれど歌に成せずひと日過ぎゆく
百八十キロ離れし町に住む次男に会ふことができた今日は良い日だ
日曜の朝はアンパンマンを見む子らが幼き頃よりの習慣

熊の情報

黒 沢 幸 子 岩 手

「発作性頭位目まい症」に「带状疱疹」語呂よき二患の保持者ぞ我は
「老老介護」知らずに逝きし古人か^{ふるひと}人生わづか五十年^{ごじゅうねん}とは
わが家の両隣り家に熊現れて^あ蜂蜜・玄米食ひ荒らされぬ
熊よけになるかと^{はかな}儚軒下に南部鉄器の風鈴吊す
ハウスステンボス土産に孫に^{あがな}購ひし「テディベア」いま改めて見る
「そうじゃない、そうじゃないんだ」へべれけが独りこちてる終電の中
熊の情報
京都より今日も夏日とライン来ぬこちらは暖房つけたと返す
町中に三日続けて熊が出ぬ歩いて四、五分ほどの近さに
幾たびも町に響くは熊追ひの銃砲の音 日暮れ陰しく

市役所の放送よりも友からのラインが早い熊の情報

県外から城跡訪ねて来し人のまづは問ひたり「熊出ませんか？」

「城跡より歩いてすぐの所にも熊が出ました」…本場の事

満足できる歌

大 平 勇 次 * 茨 城

熟年の夢追いかけた二十年過ぎてしまえば時は短し

裏庭の銀木犀の葉をたたく秋雨の音湯船にて聴く

円安を誘導できてデフレから脱却できた理想の日本か

過ぎて来た人生はかなり長いけど満足できる歌一首なし

八十一過ぎたから店をやめました寿司屋のおかみささはと言う

次々と身の回りから従兄たち消え去りし夢現実となる

小島 なお選

火 事

村 田 淳 子 * 埼 玉

戸をたたく隣のもえかちゃんの声「おばちゃん火事だ！おばちゃん火事だ！」

消防車の音近づきてつぎつぎと太きホースが放水はしめる

火の元の左どなりの友の家を赫き大きな炎が襲う

七軒に火は広がりてしばらくは集会所にと声が聞こえる



五十年のんびりくらすわが街に今年は泥棒被害もあいつぐ
スーパのフェンスに絡まる忍冬^{すいかすう}右巻きか左巻きか見ながら帰る

すぐに止まった

清 水 佑太郎 * 千葉

有給をとれば必ず起きること我が犬の急な体調不良

壁見れば尿の二滴が赤っぽく我が犬と五秒弱見つめ合う

日に三度から五度散歩していますうちの仔、膀胱炎になりました

ロードスター・ファンミーティングを横目に見、MANDAと検索窓に入れたる

九十九里浜はワンコに優しくてチーバくんの左腕良し

九十九里浜に我が犬駆けておりリードが切れてすぐに止まった

白 壁

白 井 良 子 神奈川

夫が挽ぎ下で受けとる富有柿陶器のやうでつるり冷たし

トランプが立ち寄る基地へ低く飛ぶ三角翼の爆撃機二機

赤黒き夕雲を見てトランプの核実験の唐突をおもふ

樨の実を一つも見ない白神山^{しらかみ}の異常なる秋きこりは語る

もみぢする木のでつぺんのクマの子を麻酔の矢にて眠らし帰す

バカの壁、年収の壁、ことばの壁いろいろあれど白壁の美し

秋 祭 り

滝 口 良 子 神奈川

自治会の秋の祭りのビンゴ燃えへあきたこまちが喝采を受く
秋祭りの気のは残る月曜日そとわたりくる金木犀の香
二つ三つ銀杏落ち葉をからませて角に葬送の案内板立つ
接骨医の前の花壇が均されて刺されて残るシャベル一本



垣の隅にうすべに色のコスモスを植ゑたる人の病むを聞きたり
草のいのち最も強しとおもはせて東海道に延びるくずの葉

母 の 家 荒 川 ゆみ子 東京

とのぐもる駐車場に虫が鳴く子だくさんの家のその跡
老ひとりとさくら落ち葉に手を入れて何かひろへり月の出の頃
冬雲の動かぬあたり使はない布団が重なる母の家ある
真夜覚めて温き牛乳飲むと言ふ、母は母の母に会ひたくて
窓ぎはの青年の木は降る雨を知らずその葉にうす埃せり
今はない家のポストの開け口の冷たさ思ひ出したり今朝は

風間 博夫選

働くクレーン 降 旗 宣 子 東京

五階より見渡す街のひとつとところ大きいクレーン立ち上がりたり
午前八時穂先ゆらりと伸び上がりクレーンは早働きはじむ
紅白にその身飾りて遠く立つクレーン今日も元氣さうです
飛行場へ下りゆく小型機見送りて穂先ぐるりと返すクレーン
夕焼けの空よりゆるりとたたまれて朝のかたち沈むクレーン

遠富士にその身傾け動かざるクレーン今日は日曜日なり

首 都 高 古 川 公 毅 東京

首都高と新宿副都心と多摩ニュータウンの整備に尽くしき山田正男は
東京の交通渋滞解消に都市高速道路を君は整備す
交差点の連続立体交差化の発想に立つ首都高速は
業務機能分散のため新宿に副都心整備を君は主導す
淀橋の浄水場を移転させ新宿副都心を整備せし君
千字との制限内に収まらず山田正男の評伝書けば

ゆるゆるするり 阿 部 直 子 新潟

五年後のわれのすがたは霧の中国勢調査スマホで返す
除草剤撒きたる跡と撒かぬ跡 雀帷子まだらに残る
枕辺のロウソクの灯はLED線香あげずに手を合はせたり
ギンヤンマにかまれ逃がした敗北感、最後のあんパン先に買はるる
医師は言ふ「ぴんぴんころりは難しい、ゆるゆるするりがおすすめですよ」
秋の蚊が顔のまはりにまとひつきふはふはつと眉間を刺しぬ

柿 攻 め 金 平 明 義 新潟

来夏こそ行くと応へてゐるものをわれを嘘つきにしてみきは亡し
濡れ落ち葉足に踏みつつきみからのメール途絶えて一月が過ぐ
白杖に上つて下り左手に折れて上つてお薬師ここは
お薬師に参ること四千八百日八十四歳十日目けふは
人の名の出でぬくるしみ日々かよふお薬師様は助け賜はず

佐渡ヶ島から三河から高知から今年の秋は柿攻めに合ふ

目 標 地 点

高 橋 梨穂子 *新 潟

花びらの整列乱れてごみになるときの近づくブルーガーベラ窓をあけておくには寒く窓をしめておくには暑い平凡なきよう山があれば山を見つめるこんな日に目標地点のない空を見るそれはもう沸騰だろうというほどの動きを見せるケトルを止める星のないプラネタリウムの静けさを胸いっぱい吸いこんでいる雨だけが目に見えているコンビニの駐車場にはぬばたまの夜

原 賀 璦子選

クマ史に残る

山 口

明 *新 潟

「クマ捕つたら、瘦せてガリガリ」猟師いう秋なき山に冬がもう来る熊鍋の会に次々出されたる脳みそ、熊の手心して食う飢饉飢餓クマを襲いてヒトの世の無情のことは絶滅危惧種ブナの実は地豆のごとく旨いぞと松野功氏教えたまいき香ばしく栄養価高きブナの実の今年の飢饉クマ史に残る今年まだ来ぬと柿の木を指す翁クマの山辺にヒトが住みおり



伊 那 谷 の 秋

塚 平 幸 子 *長 野

畑横を集団下校する子等のランドセルにも熊避けの鈴

滝の湯で滝を見ながら湯に浸かる梨の出荷はまだまだ続く豚や牛食べてるくせにと言われそうなれど熊駆除可哀想すぎる寝るところがあつて御飯が食べられてたまに旅行に行ける幸せ和梨済み洋梨を穫るその前に夫にあわせて海釣りへ行く柿積んだ軽トラ、道を行き交つて伊那谷の秋本番となる

一

望

辻

幾

則 岐 阜

白壁の町筋ありと訪ぬれど風のみ通る午後三時半

枕木と枕木の間の高さ草風に揺れをり山陽の駅

いつのまにかローカル線の駅となり線路一本使はれずあり予讃線の駅から十キロ山あひに大江描きし「谷間の村」あり定食のみそ汁吾に甘かりき「お遍路さんにもよく言われます」城山に登りて大洲を一望す川さへ時の止まれるごとし

巻

雲

藤 川

玲 子 *岐 阜

どうしてもつかめなかつた空に浮く巻雲すしきものようなあの日の言葉限りなく夕陽に向かう椋鳥においてけぼりにされる気のするオリオンから冬の大三角をなぞる時指の間を風の抜けゆく留守電に弱音吐きたるガサガサの声は入院二日目の母左足を先に踏み出すこたわりで二秒静止し乗るエスカレーター午後五時半西の彼方の夕映えを想像しつつ病院を出る



ひとつとびして 高山幸子*三重

恋 歌 伊東文弘 愛知

われは老いのちの賛歌を歌ひたし野鳥の恋歌聴きつつ思ふ
わたり来て若葉のさくらに巢を編みしオオルリ鳥はこゑ清く啼く
雪消水増しにし川に婚姻色帯びる石班魚のくれなゐひかる
獵師らに護られ通ひし小学校疎開の子らに会ふ日なかりき
熊呼ぶと柿柿さへもみな伐りて柿の実あらぬふるさとの秋
わが友の撃ちにし熊の写真のる「さくま村報」を兄にいただく

小田部 雅子選

なんでだらう 三木裕子 愛知

連休の後の目覚めは重たくて職場放棄が頭をよぎる
真夜中に熱きココアを飲みながら腎臓癌の余命調べる
死ぬならば遺族年金くださいと頭をよぎるオベ説明の中
決心は今かもしれない病得た君の未来を背負ふなら今
ステージⅠ 五年後再発二十パーセントよしとしようか一緒にみよう
癌告知聞きしその夜の満月がなんでだらうと輝いてゐる

伯父の作文 難波達子 兵庫

片仮名が小さき墓石の裏にあり七歳で逝きし伯父の作文
画仙紙を置きて濡らせばくつきりと明暗つきて文字浮かびくる
犬捕りに子犬さらはれ泣きし伯父墓石の作文昭和四年
おそろしき癖字異体字大正の戸籍謄本もはや古文書
七歳で亡くなりし伯父出生と死亡受け付け同じ文字なり
山削るはやめにしたるやほつと緑生まるる赤肌の山

いま熱いです 瀬尾 恵*鳥取

おしやれには縁がなかったもうとのヘアアイロンがいま熱いです
「髪を巻くコツは小束に分けること」オトナたのしい姉妹の Zoom
コージーをかぶせて2分密やかに吹雪の夜がはじまるポット
湯気あがる紅茶へ息をふきかけて冷えた鼻さき溶けてゆくなり
ちいさな実つけたエホバク庭先に晩秋の陽を集めてねばる
繊細な夫の「きげんあやしくてスマートウォッチのベルトを褒める

もつと遠くの

長石幸子*鳥取

アスファルトの間に伸びたる「ど根性ひまわり」咲いて猛暑果てたり
「父さんは帰らないよ、もう」玄関に寝そべり待てる猫に声掛く
「帰って来て！」ほほえむ遺影に呼びかけぬ今日もあなたは微笑むばかり
遠き里より移したる野紺菊もつと遠くの夫に手向ける
夫逝きてまだ実感の湧かぬな話は全て過去形となる
若きわがピアノに集う園児らが「どんぐりころころ」跳ねて歌いき

斉藤 梢選

秋のとほりみち

藤井弘子 岡山

カーテンの隙間にのぞく薄光ゆつくり満ちて白秋の朝
ふらっぱんに卵がいろづき焼けるまで朝のひかりはきれいなままで
吸ひ込みてけたたましき掃除機にまた思ひ知る小さな不覚
郵便屋のながくとどまる音とはく蟹気楼の海を見ることはなし
むき終へて光とかぜに渡すなら柿はオレンジ発光体に
ひとつぶの葡萄を口につぶすよりわが身は秋のとほりみちなり

姉のたましひ

阿野康子 山口

死の近き姉に意識のなき二年吸入のふくろ膨れては曇る
あめつちに命あづけて眠りゐる姉は短く髪を刈られて
けふにして彼の世へと居を移したり病み深かりし姉のたましひ
晩秋の予定に埋まるカレンダーを見ればわれに計報届きぬ

斎場へのみどりの経路 風透る八女の台地にうねる茶畑
うづくまり腓返りをやり過ぐす夜更け身ぬちに真水与へて

落差に惑う

武市尋子*徳島

階段を三つ飛ばしに下るよう夏から冬への季節の推移
三匹のメダカも家族「おはよう」と声かけわれらの日常のあり
撤退のコンビニあとの空間はひかりと闇の落差に惑う
冬菜植え作品展も終わりたりしみじみ受ける日向の温み
降る雨に草引きを止め午後の吾は眼凝らしてキルト刺す老い
書写山の式部の歌碑は摩耗して昏き木群にこころの残れり

声の残像

豊田桂子 愛媛

葛の葉の繁みにはつはつ彼岸花うつろふ秋の主役が咲きぬ
暮れなづむ空の三日月山里の宵を照らせりするどい細身で
もみぢする真際のポプラ顔つきがやけに神妙大木なれど
さよならと言はれて返す夕闇の部活帰りの自転車列に
さよならをひとりひとりと交はしつゝ見送れば闇に声の残像
聴きをれば心の澱が消えるやう中学生の混声合唱

初冬の寝息

間城佐代 高知

さよならと秋に別れを告げることほらひとひらコスモス散りぬ
川面へと光の影を残しつつ夕陽静かに闇に消えゆく
傑作の歌浮かびくる床の中メモに残せずことば散りゆく
公園の落ち葉踏みある靴裏にかすかに届く初冬の寝息

人生の一步先など分からねどまづは窓開け空氣吸ひ込む
姉逝きし歳と重なるころとなりしきりに浮かぶ姉の笑顔よ

鈴木 千登世選

九州場所

手嶋 千尋*福岡

西新のミスドに力士が出現しドーナツ買っていく十一月
スエットの力士三人ドーナツのショーケース前ドーナツ選ぶ
南から入ったけれど右が「西」左が「東」の相撲会場
静けさの一瞬のあと立ち合いのぶつかり合う音そして騒然
玉鷲の右手が相手を押し返しぐうぐうと押してゆく九州場所
同僚の「推し」は呼び出し克之さん「ひがしし」と響きまろやか

天主の鐘

垣野 幸一*長崎

明けそむる山の端うえに光る星「天主クルスの鐘」のおごそかに響く
朝夕に響きわたれる鐘の音をききつつ暮らす街に住みいて
自転車をもたせこいアに立てかけて異国青年汗拭きにけり
白き猫しのびあらわれ碑の前の献水桶の水飲みて去る
潮退きし川の浅瀬にうなだるる鷺をしみれば孤独深まる
墓地内の墓標みめぐりわが胸に頭ちくる人らみなはるかなり

対景図

安田 博行 長崎

若きころ対景図書き通過せし来島海峡とほくにのぞむ
煌々とさざ波ひかる安芸灘を夕日めがけて航くヨソロー

あかき橋ふたつくぐりぬ清盛がひらいたせまき音戸の瀬戸の
江田島の大講堂や赤レンガときはの松も若き日のまま
構内を自由に移動できなくて組織去るとはかういふことか
この島をふたたび訪へる日のありやフェリー静かに小用をはなる

ふり向かず行く

福島 登美 熊本

ながき世を土に埋もれし石棺に確に残る人の手の跡
いにしへの朱の石棺に人はなくながき月日に消えてゆきしか
背後より枯葉追ひ来る気配ありふり向かず行く晩秋の道
いつの間に七十余歳となる我か免許更新のハガキが届く
となり家に子の生まれしはわが夫の命日にして人には言はず
蜻蛉の群れとぶ中を歩みゆく迷惑な奴と思はれながら

奄美丸

丸山 克介 鹿児島

かつて我が乗りたる船よ「奄美丸」太平洋に舳先向けたり
日焼けせし腕に抱へてお知らせの紙配りある島の区長さん
「農林課」の軽トラの男公園の草刈り終へて昼寝してをり
潮風に強きが故に我が島の海岸守るアダン茂れる
珊瑚なる石垣覆ふがじゆまるの枝元下校の児ら休みある
秋の日を山襲深くのみこみて桜島なほ煙を吐かず

☆

☆